

生死に流転する身体

——*Yuktidīpikā* における輪廻主体考——

近 藤 隼 人

1. 緒言 古典サーンキヤ体系では精神的存在プルシャ (*puruṣa*) が本来いかなる束縛をも離れているとされる以上、輪廻主体としてリング (*liṅga*) や微細身 (*sūkṣmaśarīra*) の存在が想定された。このリングや微細身についてはその構成などが必ずしも明らかにされているわけではなく、その点は同体系の大綱を示すイーシュヴァラクリシュナ著 *Sāṃkhyakārikā* (*SK*) においても同様である。本稿ではリングの拠り所に言及する *SK* 41 のテキスト問題に解決を与えるため、*SK* に対する特異にして有益な注釈書 *Yuktidīpikā* (*YD*) を解説する。加えて、適宜他の注釈書との異同も交えつつ *Mahābhārata* (*MBh*) モークシャダルマ (*Mokṣadharmā*) 部の検討を通じ、イーシュヴァラクリシュナの真意の在処に対して肉薄を試みる。

2. *SK* における輪廻主体 議論の端緒として *SK* の記述を検討することで、*YD* 解説の礎石とする。最初にリングの様相を示す *SK* 40-41 を掲げる。

リングは太初に生じ、妨げられることなく、[プルシャごとに] 定められ、大 (統覚) にはじまり (*mahādādi*)、微細なるものに尽き (*sūkṣmaparyanta*)、享受なくして輪廻し、[統覚の] 諸状態によって色づけられる。(*SK* 40) 例えば [画布や壁などの] 拠り所なくしては絵画もないように、[また] 例えば杭などなくしては [その] 影もないように、リングが特殊態という拠り所を離れて (*vinā viśeṣaiḥ*) 存立することはない。(*SK* 41)¹⁾

ここからはリングに少なくとも統覚 (*buddhi*) が含まれることが理解され、“-ādi” と “-paryanta” とに対し構成内容の最初と最後という意味で対比を見出せば「微細なるもの」もリングを成すことになるが、その指示内容は判然としない。そこで *SK* におけるリングの他の用例に目を転ずると、着目すべきは *SK* 20 である。*SK* 20 ではプルシャとリングとが結びつくことで、非精神的なるリングが精神的であるかのようになるという。精神性を帯びるといふこの点からすれば、リングに統覚・自我意識 (*ahaṃkāra*)・マナス (*manas*) が含まれることは予想されるが、タンマートラ (*tanmātra*) や元素 (*bhūta*) に精神性が付与されるとは想定しがたい。

そして、SK 41 の “vinā viśeṣaiḥ” に関しては “vinā aviśeṣaiḥ” と読む注釈書も多く²⁾、リングの拠り所たる “viśeṣa/aviśeṣa” が何を指すかという問題は解釈上の難題となっているが、その解明の契機は SK 38-39 にあると考えられる。SK 38 ではタンマートラに “aviśeṣa”，元素に “viśeṣa” という別称が示され、SK 39 では「微細なるもの」(sūkṣma)，「父母から生じるもの」(mātāpitṛja)，「発生したもの」(prabhūta) として身体と思しき三段階の “viśeṣa” に言及されるが、文脈上は一連の “viśeṣa/aviśeṣa” が一貫した意味で用いられていると考えるのが通途の発想であろう。また、SK 39 の “sūkṣma” は死後消滅する「父母から生じるもの」との対比から生死を超えて恒常的に存続することが予想されるが、それはいうなれば輪廻主体リングと同じ位置づけを担うものといえよう。ただしその場合、“vinā viśeṣaiḥ” の “viśeṣa” が三種の “viśeṣa” を指すとすれば、“sūkṣma” たるリングがその “viśeṣa” を拠り所とするとは考えがたく、しかも誕生後の個々の肉体を指すと目される「父母から生じるもの」を含む “viśeṣa” がリングの拠り所となると考えるのも困難であろう。ここの “viśeṣa/aviśeṣa” が一貫して「元素／タンマートラ」を意味すると仮定した場合、三種の “viśeṣa” との整合性という観点からすれば “vinā aviśeṣaiḥ” と読んで「タンマートラなくして」と理解するのが適当と考えられる。

3. YD のリング解釈 上掲問題に対し YD は他の注釈書に比して特異な解釈を示す³⁾。それは (1) “mahadādi sūkṣmaparyantam” の理解と、(2) リングの構成という二点に集約されるが、その検討に先立ち “vināviśeṣaiḥ” に対する YD の解釈を示す。YD では “vinā viśeṣaiḥ” と読み “viśeṣa” が身体、とりわけ微細身と理解されているが、この点は微細身の非存在を揚言するヴィンディヤヴァーシンの議論において輪廻が “viśeṣa” を伴わない (nirviśeṣa) と示されることから推知される⁴⁾。YD では輪廻が “viśeṣa” を伴う (saviśeṣa) のか否かという先師間の見解の相違に言及されており、この論点が古来より俎上に載せられてきたことが窺い知れる。

3.1. “mahadādi sūkṣmaparyantam” YD は SK 40 の “mahadādisūkṣmaparyantam” 全体を複合語として捉えずに “mahadādi” と “sūkṣmaparyantam” とに分け、リングは「大にはじまるもの」にして「微細なるものに尽きる」と解している。後者について YD は「他のタットヴァ (tattva) に対する否定を述べている」というが⁵⁾、これはリングの構成要素が微細なるタットヴァに限られるということの意味している。他の注釈書は概ね「大にはじまり微細なるものに終わる」という複合語とみなし、リングの構成要素としては十三器官に加えてタンマートラ (“sūkṣma”) を含むという理解を示す。それに対して YD は “sūkṣma” をタンマートラと解するこ

(240)

生死に流転する身体 (近 藤)

となく、リングの構成要素に対する要件を成すと考えている。

3.2. リングの構成要素 リングが“viśeṣa” (微細身) を拠り所とする以上、少なくとも両者は異なるタットヴァから構成されることになる。輪廻主体として動きを伴う以上、遍在するプルシャとプラクリティ (prakṛti) がその構成要素となるとは考えがたい。YD はリングを形容する「大にはじまるもの」を八プラーナ (prāṇāṣṭaka) と理解しているが、それは“pur”, “vāc”, “manas”, 五風 (prāṇa, apāna, samāna, udāna, vyāna) を指すという⁶⁾。この前三者について“pur”は統覚にある〈自我意識の状態に対する意識〉(ahaṃkāravasthāsamvid) を指し、“vāc”は行為器官、“manas”は知覚器官を指すとみなしている⁷⁾。この“pur”の解釈は要を得ないが、SK 40の「大(統覚)にはじまるもの」からリングに統覚が含まれることに異論の余地はなかろう。一方、自我意識やマナスといった他の内官がリングに含まれるのか否かは判然としないが、YDでは内官と知覚器官が微細であると明言されているため⁸⁾、それらは上でみた「微細」というリングの構成要件を満たしていることになる。加えて胎児の誕生過程において最初に“asmi”という意識が入り込むという点は、リングに自我意識が含まれることを推知させる⁹⁾。また、マナスに関しては明言されないものの、マナスを欠いては対象認識も達成されえず、しかもそれが死後や受胎後にもたらされるとは考えがたいため、マナスをリングから排除すべき特段の根拠は見出せない。以上より、三内官がリングの一要素を成すと考えても大過はなかろう。また、この「微細」というリングの条件に照らして、行為器官も微細と考えられていたのであろうか。内官と知覚器官を微細とする根拠としてYDは、それらが微細であるが故にその説示は作用の説示をもって代えとする。その前提からすれば、行為器官も内官(SK 23, 24, 27)や知覚器官(SK 28ab)と同様にSK 28cdにおいてその作用が述べられる以上、同じく微細であると考えられる。そして五風も微細と考えられるため、五風および十三器官が八プラーナとしてリングを成すことになろう。無論ヨーガ行者等にのみ認識されるタンマートラのような例外も生じるため¹⁰⁾、微細であればすべてリングに含まれるというわけではなく、“sūkṣmaparyanta”はあくまでリングの必要条件にすぎないと解されうる。そしてこの八プラーナは微細身に分立するとされ¹¹⁾、微細身は八プラーナの担持者となるため¹²⁾、それは十三器官以外のタットヴァでプルシャとプラクリティを除いたもの、すなわちタンマートラないし元素から構成されることが理解される。器官が微細身に含まれないという点は、微細身に関する諸学匠の見解の中で微細身が器官を特定の場へと至らしめる旨の記述がみられる

ことから確認される¹³⁾。さらにまた、大元素から成る粗大なる身体は六鞘(毛・血・肉・骨・髓・精液)から成る(ṣaṭkauśika)とされているが、そもそも六鞘が「鞘」(kośa)と称されるのはそれが「[八] プラーナを伴う微細身」(sūkṣmaśarīraṃ saprāṇam)を包み込む(āveṣṭana)からであるという¹⁴⁾。したがって、微細身の構成要素に元素が含まれるとは考えがたいため、微細身はタンマートラによって構成されるものと推知される。以上のYDを検討する限りでは、SK 41の“viśeṣa”はタンマートラないしタンマートラから成る身体を指していたと結論づけられる。

4. “viśeṣa”の意味内容 以上のようにYDは“viśeṣa”をタンマートラと解していたが、それではSKの用語法に一貫性を欠くこととなる。SKの権威保持を金科玉条とするYDにしてみれば“vinā aviśeṣaiḥ”と読むことで一貫性は保たれるはずである。実際にSāṃkhyasaptatīrtiなどの注釈書六本は“vinā aviśeṣaiḥ”と読み、タンマートラと解している。しかしながら、輪廻は“viśeṣa”を伴うのか否かという古来の論題が示すように、古説に通じたYDとしては“viśeṣa”がSK以前からの伝統的術語であると認知していたからこそ“vinā viśeṣaiḥ”と読んだとも想定される。この術語としての“viśeṣa”は、SK以前の成立と目されるMBh第12巻モークシャダルマ部にも顕著に認められる。モークシャダルマには「タンマートラ」という語こそみられないものの、音声・感触・色・味・匂いというタンマートラと同じ組成を指して“viśeṣa”と称されている¹⁵⁾。しかもそれらは元素からの展開物とされ、展開系列の最後に位置する元素の特性(guṇa)として理解されている¹⁶⁾。また、この“viśeṣa”と輪廻との関連は判然としないが、輪廻主体に関して一例を挙げれば、個我(śarīrin)は死後五元素に入ると、聴覚器官などが五種の元素の特性に依拠するという(MBh 12.195.19)。五風の位置づけこそ不明確ではあるが¹⁷⁾、この記述からは器官がタンマートラを拠り所として輪廻するという上の見解との類似性も看取される。

5. 結語 YDを読み解く限りでは、五風および十三器官がリングとして“viśeṣa”すなわちタンマートラ(微細身)を拠り所として輪廻するという構図が想定される。この“viśeṣa”解釈はSKの用語法に反する可能性こそあれ、輪廻に“viśeṣa”が伴うのか否かという古来の論題、およびモークシャダルマにおける“viśeṣa”の用法からも確認され、“viśeṣa”は音声などを指す伝統的術語であったことが窺い知れる。その場合、SKにおける用語の一貫性という観点からすれば“vinā aviśeṣaiḥ”との読みが至当と考えられるが、元来は“vinā viśeṣaiḥ”であった可能性がある。これはSKが既存の表現を借用したという可能性を示唆するものでもある。以上の

(242)

生死に流転する身体 (近 藤)

考察からは初期サーンキヤ思想が異説をはらみつつ輪廻主体論を展開させてきた点が浮き彫りとなり、さらにその中で YD の有する資料的価値が再確認された。

- 1) SK のテキストは YD (*Yuktidīpikā*, ed. Albrecht Wezler and Shujun Motegi, vol. 1, *Alt- und neu-indische Studien* 44 [Stuttgart: Franz Steiner Verlag, 1998]) 所収のものに拠った。
- 2) 中村 1982, 356 等参照。 3) 以下 YD 以外の注釈書の解釈については中村 1982, 355-56 等参照。 4) YD ad SK 39 (230.6-8). また YD ad SK 41 (231.14-17) も参照のこと。この “upalabheta” は全写本および旧版に従って “upalabhyeta” へと修正を要する。 5) YD ad SK 40 (230.21-22): *sūkṣmaparyantam iti tattvāntarapratiṣedham āhaitāvad eva nāto ’nyad iti*. 6) YD ad SK 40 (230.20-21): *mahādādīty anena prāṇāṣṭakam prati-grhṇāti <pūr vān manah> prāṇādyās ca pañca vāyava iti*. Chakravarti 1951, esp. 269n2; 茂木 1978 等参照。 7) YD ad SK 29 (208.27-209.13). Chakravarti 1951, 269-70 等参照。 8) YD ad SK 29 (205.12-22). 9) YD ad SK 29 (204.26-205.2). なお, “<cābhi>vyaktā (?)” という読みは文脈上感官が未発動の状態が望ましいため, 全写本の読み “caiva hy avyaktā” が適当と考えられる。 10) YD ad SK 5 (77.1). 11) YD ad SK 40 (230.27-28): *tatsāmarthyāt sarvatrāpratihatam prāṇāṣṭakam sūkṣmaśarīre ’vasthānagamanamātraphale vyavasthitam*. 12) YD ad SK 39 (228.4): *tatra sūkṣmā nāma ceṣṭāśritaṁ prāṇāṣṭakam saṁhara<nti>*. (これら [三種] のうち「微細なるもの」は, 行為に依拠する八プラナーナを保持する ([母胎へと] 導く。)) 末尾の “saṁhara<nti>” は現行の “saṁsarati” を修訂したものである。男性複数形の “sūkṣmāḥ” (SK 39) とは数が一致せず, しかも文脈上八プラナーナは微細身と相異なるものであり, “prāṇāṣṭakam” と同格で理解することは困難である。そのため, D 写本 (5.11) による修正 “saṁharati” を活用して微細身が八プラナーナを「保持する」ないし「[母胎へと] 導く」と理解した。 13) YD ad SK 39 (230.1-2): *p<a>tañjales tu sūkṣmaśarīraṁ <saṁsiddhikṣaye (?)> pūrvam indriyāṇi bījadeśaṁ nayati*. (一方, パタンジャリによれば, 微細身は六成就の時期が終わると最初に感官を種のある場へと導く。) 14) YD ad SK 39 (228.4-10). 15) Strauß 1913, 265 参照。 16) *The Mahābhārata*, vols. 15-16, *The Śāntiparvan*, part 3, *Mokṣadharmā*, ed. Shripad Krishna Belvalkar (Poona: Bhandarkar Oriental Research Institute, 1954) 12.224.35-38. 17) *MBh* 12.206.17 では五風が胎児の身体を維持すると表明されている。

〈参考文献〉

Chakravarti, Pulinbihari. 1951. *Origin and Development of the Sāṁkhya System of Thought*. Calcutta: Metropolitan Printing and Publishing House.

Strauß, Otto. 1913. “Zur Geschichte des Sāṁkhya.” *Wiener Zeitschrift für die Kunde des Morgenlandes* 27: 258-75.

中村了昭 1982 『サーンキヤ哲学の研究——インドの二元論——』大東出版社。

茂木明三 1978 「Yuktidīpikā の研究 (I)」『印度学仏教学研究』26 (2): 677-78.

〈キーワード〉 *liṅga*, *sūkṣmaśarīra*, 微細身, *prāṇāṣṭaka*, *viśeṣa*, *Mokṣadharmā*

(東京大学大学院)